里見八犬傳 第九輯 巻貳

3416
50

13
3416
5

九編八犬傳巻之四

二

枚野
猗苧院

南總里見八犬傳第九輯巻之二

東都　曲亭主人編次

第九十回

高畷の板橋より道節戰馬を放つ
五十子の城ゐ信乃姓名を留む

その夜けの當下毛野ハ悄然と孝嗣まちに對して通ゐ河鯉生恩の與ゐ命を擲ち讎言の為ゐ干を枕とす是戰國の慣也。死してその名を後ゐ貽もハ武士の欲する所なれども。亦時宜ゐ依るべきのミ。和殿血を栗の勇を負ものその退くを羞ぢる為ゐ戰殺せまく欲するとも。大山いづくぞ大人氣なく。和殿と刃を交んや。嗚呼痛しいかな守如。愚忠豪男智計儔稀也。主君の與ゐ奸黨を除んと欲するその筮詩策可とハいへども。原是機変ゐ出れバ仇ゐ知らず。魔障あり。夫君を愛して乱を怕れその辟ゐ未然ゐ査そよく奸佞を除くゑハ則是忠臣。表れども。謨る所正理ゐあらず。機変を旨とせし故ゐその筮詩策成るゐ及びて。反て君を危くして。その身を殺を苗害ゐ。鮮目前の賢ゐも。倶ゐ死然いを沼ざるゐ是

隱慝の出ずるを蓋天道は善ふ福を必淫ふ禍を淫は密に隱慝を君の惑ひを醒し難て
已ことを得ざ做はゞ其の所機変れば衆魔の出ずと爭何はせん然るを況狡兒世才と眞智
徹と旨と。密に隱慝せざるとき。一旦その利ありとへども機変の所以ふ支の破れふ至らぬほのめ
孰ろあらん那楊震が四知の誡守らば後悔なんぞその理は徒地なれども鮮目前と死生の如は
機変の破れあるを支一毫も私欲なく。苦節孤忠の所行れば香しく身後ふ送らん然が
是。死ぬるのは福あり生るとへども恥ずべきその禍鬼の来路を推せば定正まを招く所只利を好まく
飽とあけれどその身の慾ふ相愜ふ佞人とのみ親愛し賢妻忠臣の諫を聽ざ武毛信越の四人
國を有ちながら絶ふ一百許人る敵ふ迫れ城と陷され士卒咸離散し賢妻忠臣刃ふ伏ぬ
かつ菲薄を省て持資親子を用ひず管領は只名のみそその家是より衰ん和殿あの理埃よく
悟らば這里ぞ戰歿ぶべし存命て主君ふ仕へ諫めて主君の惑ひを覺さば忠孝両全ふ
べし。なを助言ふ似れども我苟も守如畏と一面の交りあるその子の與ふ理を推てらいざるとを得ざると

みずから念ひ思ふと最懇切ふ諭しる理りを聞れば孝嗣は答難く沈吟しる頭を抬げうち頷く。
現ちろるを大阪王和も漢も今も昔も敵の為ふ紿れて命を殞ん玠の為ふ諭されて
死ぬるとは為ん所なん。なを未曾有の好意なれども後ひく死呼あり這里ふ留り隊兵は皆腹心の每
ぬく我親の忠義ふ死せしを惜ぶとふ思ふるし。怎れば今その問答も憚るとふ既ふ和殿ふ
いられる那楊震が四知と思へば小子敵と對陣あるを。征伐前一條も射ざぬ反て長談緩語て
その仮立も別るを知る者あるて主君ふ禀さば忽地ふ疑れて罪ふ陥れる所行るべし。倘今寛屈の
罪ふ沈ぬ。獄卒のるふ死ん祈這里ぞ戰歿せばりを後悔ともを及んや。と推辞むと毛野は云と
なを諭さんと欲せしを道節恢ぬ聲ぬ立て其頭の遠慮は然るとを定正の惑ひ竟ふ醒
ぬは這里ぞ陣歿ぬるとも。いかでその義烈をなりん我けの戰ひふ曰く敵を殺せしは獨管領定
正を敵る果ぬを與るふぬを漏しては幾千人衆ふ嘯んや。遊莫定正走るとへども
我そが盛首をば捕る所豫讓が刺る衣ふ優ぬべし。和郎死くいみじくも死ん我大刀は雖言を敵ち

又世の邪魔を征するを縦寇家の家臣とも孝烈忠義の後生を敷さん刃を持ざる和郎
よく這意を會得て大阪の意見に就べ目今食さる東西をあれとらひく後方を防へて
その馬をへと指招けば雑兵がそろ〳〵て凄く奉寄せる馬を傍に駐めまし又孝嗣がうち對
ひて河鯉生此は是仁田山晋五が乘さる馬を鄭商に晋五を射て落して雑兵们に捕せて我軍
用の資にそろへて進退を自由をなさるを今へも仇に走り軍散して又用る所る和郎這馬をうち
跨て逃るを主を提者べ敵に捕られ躬方の馬をこちも復せる微功とるんと諭して後方をえ
かへて雑兵に持さる盛とやをそ食る抗てされは是首級に換さる和郎が主の頭鎧を和郎が
忠孝の愛を所に獲させまほしき東西をうら目今へ遽与へ〳〵明日高畷へ来て食られ然らば
做さとなるよあらば主の恥辱を隠て功あり這里を死さるに勝べきやとらひも件の馬を板橋
頭へ牽向て尻を礫と撻べ馬は忽地驚て橋を渡して前面へ走る孝嗣禁と食
駐めて道節毛野们をうち對て教諭殆感謝に堪ず仁義の敵を胸の剣を鉛をうちも向に

由るべ然らばその侭立別れと答て躰て眉尖刀を雑兵に持さる角弓左るに掻含て馬に内りと
うち跨れば隊兵们ぞ安くそろ〳〵て轎子の戸を閉て龍て抬起て徐に早て先をぞ立ける孝
嗣れをそろへて馬に拍れ両三番輪馳をそろ〳〵遽く弓に前刈り弯固めて安れ犬山道節忠
與君夫人の仇父の怨且我君の會恥辱の恥に異日の戰に雪んと欲さる孝嗣が哲言の征前に感
て名告かけて漂と射る見的狂に道節が背後に拉る椿樗の根に射入る本
事に感る毛野道節憶ず倶に振へて適射る微妙の弓勢その樹に則忠與们が廟字に
象る是狗椿節に則是道節當意即妙歌人の風流に優る進止をうるを快邁れと
以ば孝嗣鞍局に揖を表る生別けらべく遽ろに馬無旋を片鞅二町許先へも早く親に亡
骸の轎子に走着んと一鞭中る武者態を適に目送る荘介小文吾現へも亦大角も其頭に
聚合て雑兵们を齊一嘻と嘆賞の聲を合て憎〳〵適敵やと稱へる却説毛野道節
舊の屯に退て自餘の大士们相労て這那の問答を最愛て感る中に荘介小文吾に

忠孝を感
貴〜く
二犬士
孝嗣と論
毛野
道節

河鯉權佐守如
犬塚

毛野道節ふうち對して。皇裏ふ荒芽山の急難より。我们四方へ離散して。諸國を徧歴せし折ふ遇ふ所の者知音ふあらざるはなし皆是互人のみ。獨越後の長尾の家臣稲戸津衛由元のみ。況や彼の奶々籠大刀自ハ傳聞の訛舛を。我们を憎むと執念深き過ぎられども。邪智奸悪の婦人ふあらざ北越數郡を威服して。その子息與ふ扞城と云ふ。いの母丈夫とふふ庶かり。這主従を除くの外ふ稱もべきものなしふ今亦茲ふ鮮虫目前と守如親子の良善あり。那籠大刀自と由元の上ふ生ふ。縱寃家の眷屬なりとも。一旦支の錯ひより。主従刃ふ伏ひ。ふ最惜ふ。べきものふ。とのべ現ハ大角ハ共侶ふ點頭て。然へ扇谷定正ハ軍師ふ内管領巨田持資ふ。そを退けて敢用ひず。又内室ふ鮮虫目前の賢才あり。又老黨ふ河鯉守如の忠誠あるを看れども悟らず。所けども用ひず。縁連们の奸佞人を。專信用ふ。武威年々ふ衰て。恁地敗績あり。ひて箴と云べきものを。裏ふ大塚犬山を留んと欲ふ。甲斐の國主武田信昌の家臣甘利竜元の支を守ふ賢を愛ず心あれども。いまだ拔萃とまるふ足らざるハ捨るべハ孝嗣のみ。倘我们と同因果の天縁約束あるものなるべし。犬士の隊ふ入るべきふ。その支をハ送慨しとを道節少肯ず。問話休煩。襍尚要緊のものあるふと。禁めて貌を改め。伝と有種ふ。ふ對ひ。落點生。昨夕我軍令を相定めて。和殿ふ舩を守らせるふ。誰ぞ許して陸ふ登り。敗走れる敵を。殺るる我ぞ一百の隊兵を。ひて。仇を討ち城を拔ひ。和殿の帮助ふ憑るとハいへども。和殿漫ふ軍令を破りそハ罪を糾さずして。あるべきハ隊覚期の支ふ。敦圍ひ猛く譴らず。有種驚跪て。冥ふ趣理りを在下教諭を。茂ふ。衛戍を。ふ。ふ。ふ。ふ方の利運とおぼしくて。敵の雑兵敗走ると分明なり。けれども倘定正と。殺ふ漏せとのもあらんと思ふ。ぞ。ふ送される新水兒舶公とさへ相具へて品草の原ふ敵と。ふ。ふ果して寃家定正を。遮留たりけれども。ふ勢ふれば朽惜しも。絶ふ従類両三名。殺ふ捕ふ。と。ふ。ふのみを。併亡君の與ふ寃家を走らせ。と思ふ意の駒さへ狂ひて。那軍令を忘れるものを。許さぬかと。陪話れば。壮介小文吾現ハ大角も共侶ふ道節と相寛解め。這人仇を漏さずとて。漫ふ軍令を犯しるその罪軽ふ。ふ。昨夕一百の隊兵を。速ふ倶して。

ひを賞げる。その功も亦莫大。這功とても那衍忠が撥ゑ許ものけーうあるべ。その義を美引めねば。
と異口同話勸釋しかば道節僅に點頭て。酒家兵權と上目とーてみづから。驕昂ぶるあらば軍令
忽ちうとれば士卒是より台意べし。敵倘敗北の恥を雪めんとて猛ふヨヲ勢と驅催して引返し來て殺ふ
王あらば射方の英氣必ずび振いでゝ束ねて擒ふべん。今軍令を正しく者ものの專恣ものの與なる
とも衆兄弟の請を所その理あれば默止かるべ。異日の衆議に依るべきと。応て有種ふたち對ひく。
和殿の罪過輕ふ。ゆゑに權且諸犬の意見に就く。我今その罪を糾さば速に船に還りて衆人を
ねり。酒家の諸犬と共侶ふ五十子を赴けて。犬塚に到て凱陣せんの義を行ふ。有種
怡悅ふ勝も言葉を退けり。當下毛野に遽しく道節們と談ずるに。犬塚生の奇計ゆる辛
子既に落城し。那里に敵のあらざるべとも那河鯉の義をおもへば我身だにの各位と俱に那里に到
んと忍びがたき処あり。今とり与之七主と俱に船に在りて凱陣しもんさるれ各位も亦速に退く。
海に浮ばと欲べ。頗ふ扇谷の管領正しか。必是忍岡の城を投て走りーあんん。這里より

そ那里への路の程二里に過ぎず。那里城兵ども更に推寄ることあらば。初の戰ひと同じか
らば疲労る我ふ勢ひとも。新隊の大敵に當らんと。危しとも最危ふ。然らでも西北ふ大塚の城
あり。北ふ赤塚石濱の援あり。又鶴鷺品槻河肥の諸城あり。適ふ五十子の兵火を覩び近ふ二三時
刻の程遠ふも必通宵走りて。援の軍兵ども來べ。その義を惠ふのか。と意に屬れば道節聽て屢頷て
宜ふ微妙なりとれば。犬塚に告知し。共侶ふ快凱陣せ。和殿に素より那義を守る。船中
んとなるとも亦人の及ぶ所宜しきの意ふ儘しめと。応てその智ふ服しけり。小文吾現八大
角も共ふ毛野を稱す。親疎恩仇方殊なれども一旦大約束をその信に失ふべ。且敵を知り己を知る。兵
法も亦軍師の才あり。然ばとも仁義八行の玉の内中に智字を欠るに以ゆるなり。と。顧感ずして已
ざるに。偖而落點有種。五犬士に辭別れて。毛野と俱ふその身の隊兵五七名をいそぐ立て。高
畷の濱へ退く程ふ。肚裏ふ思ふ。約莫けの戰ひふ。大山ど武威を赫かせ。我帮助ふ憑
ばるとも。我倘ふ甚好の軍兵を驅催し。船に柴浦へ寄せ。もあらば那人義秀親衡の勇

文溪堂藏

ありとそのいろふ〜と。三百有餘の敵兵と獨戰ふて勝よりあ〜えや。佶れば功と我ふ讓りく。上席ふこそ居ふべれと思ひとりーふ然うるくて我軍人今ふ違ひ。外ゐ些も借ざりーふ是英雄の真面目。その賞罰訓ふ親疎ふ名將の遺風ありとのいま。我那人ふ叱られて一旦腹の立るとも今ぢら思へば愚痴知るる。我軍兵を驅催して大山氏と資けーふ素旦立君豊嶋殿の死と雪ん與今まべその神速と恩ひて。何なるの功ふ誇んや。我術り課ちゐ。点い管慚愧後悔ーと。七大士と敬ふ。支の始ふ弥増け。況件の光景ふ。ゐも佶もせー隊兵仁の道節ゐ賞罰訓の正ーかりーふ舌と掉を。寔ふ稀有の豪傑ゐるる彩。恁る勇士ふ從ゐぞ。我先立の怨と雪るゐ。ゐ〜ーと。嘆賞ーと。怠るりのいるるけ。尓程ふ道節ふ先隊兵ふ纏要戰飯と披と躬方の戰殺をも素及べ。快五十子と。爲べーと。莊介小文吾現八大角這四大士と共低ふ草ふ坐と占て果飯をこそ。大家飢と繕ひけ。不題更話表大塚信乃戍孝ふ鄙ふ犬山道節と共伴ふ五六十個の隊兵を從へて伏て谷山の樹蔭ふ在り既ふて道節ゐ仁田山晋五主僕と射て人馬共ふ生拘りー折辛

子の城の動静を。探て來よとそ遣ーる。間諜の雑兵ゐ走りかへりて報るゐ。縁連ゐ數ゐ。多伴當仁幾名狩五十子の城へ逃て來て。支徒々と許へ。城内騒動大々ーふ。管領定正ふ。支の勢を。ゐて大阪生仁を捕ふ。出馬の准備といそーふ。佶れば今より程もる。管領這頭と過るべ。御小心あれかと。ふふ道節紋びのゐと。憶ゐも額ふ加ゑ。料るふ倍る幸ひるるゐ。定正ふ出て來ふ挾ふ。數捕るべ。鈴の茂林の頭ふ在る。犬飼犬村一隊の士卒ふ。大阪の與ふ。ゐ〜と。動ふ及ばと。潜ふ居ると。ゐ〜ーゐ。先ゐ犬飼犬村ふ諜ー合ゑて。定正と。前後ふ攻數ゐんぞと。悄地ふ一個の雑兵を。鈴の茂林へ遣ーて。件の支の趣を。現八大角ふ告まけり。登時信乃ゑ。肚裏ふ。一計を思ひ起ゼーゐ。道節ふ悄語くゐ。定正みづ〜。緝捕の與ふ。ゐ勢を。彩て。安く來ゐるとも。五十子の城内ふ。ゐるふ二三千の士卒あるべ。然ゐ和殿の計るゐどく。定正前後ふ敵と受て。敗北ふ及ん折ゐ。支安く城内へ。ゐえゐゐ。ヨく加勢の兵を。出さるとあるべ〜ゐ。その折躬方ふ。勢之神欺忽地方位を易て。勝利反て大敗とゐ〜ゐ。酒家一箇の筮寿策ゐ。箇様々々ふ。彩ゐ五十子の城と。含ん

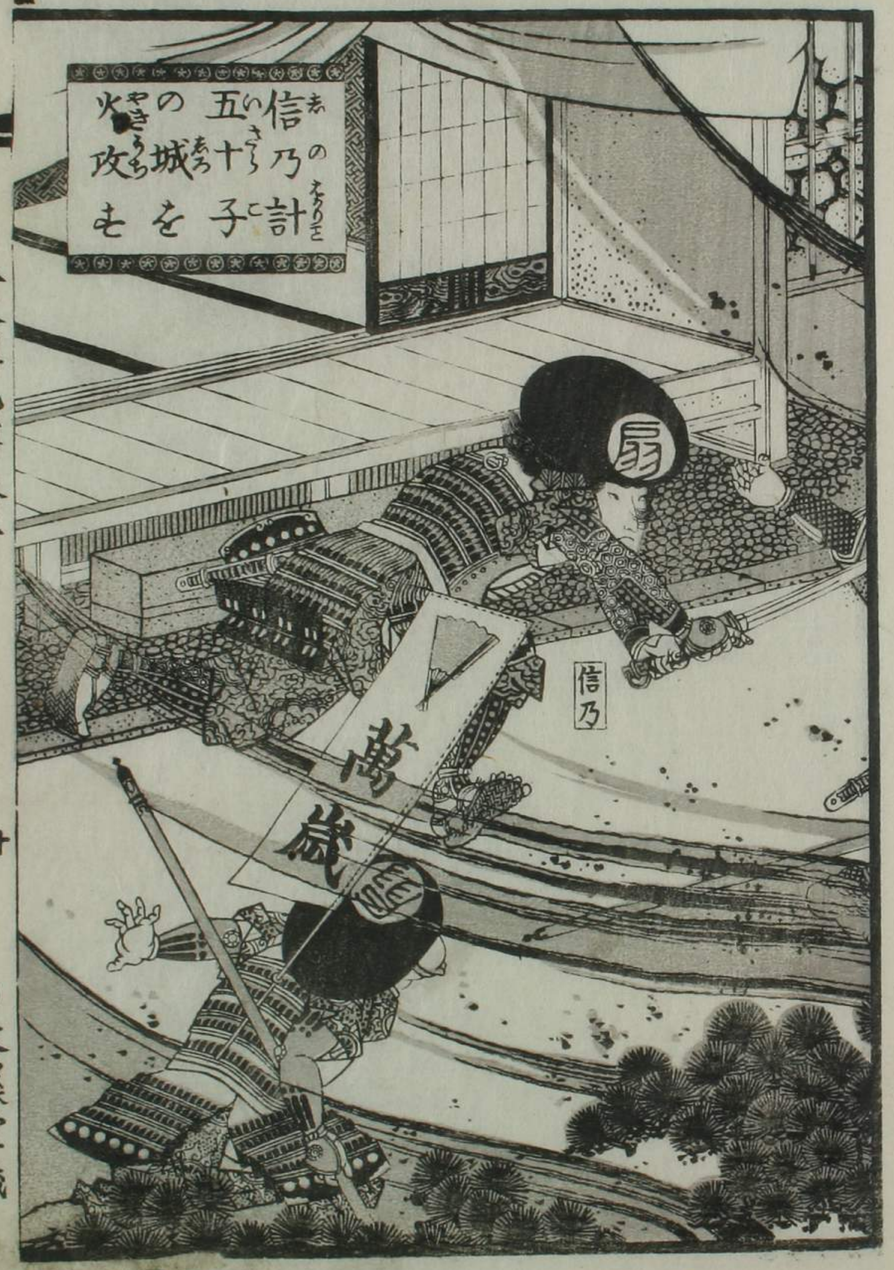
上。樹を援て枝を拂ふより易からん。と解示せば道節即斜ならず歓びて。その宴に動計を又成る時は
我們も亦後安く仇を殲さん快を準備よ。とてそろ／＼隊兵を二十許名引分て悄々地に信乃に
従ひて五十子の城に遣しけり。小程に犬塚信乃は道節が射て虜にせる仁田山晋五の伴當と聰て
身邊へ喚坐させて詞徐に鞫るやう汝は素より晋五が伴にて大塚より來りける歟亦五十子の城兵
なる歟名は何と喚做る。汝も命は惜かるべし。我計畧に從ふてその實を白く做さば命を饒して
なるべし。重く賞禄を受しめん。惡く思はゞ招せ甚麼ぞ。と問れて件の伴當は憚氣なる面色を稍變じて
額きつゝ。刀祢們上に在す和何でふ鴇鬼と言へ窮郷に小可は仁田山刀祢と共侶に逃遁ども。
那人の伴當にあらず。越杉駱三主の韃奴也。外道二と喚るゝ者也。原は白金の土民なりしを軍役の與に
駆入られて年来五十子の城内に在り。今番館(定正)より龍山主们三個の大使を相模の北條家へ
遣さるゝにより小可も起初の伴人足に充られて越杉主に隸られ命を饒しあらば何ぞ支まれ仕らん。
仰付らるべきものや。とおそるゝ陳るを信乃は聞て頷きて。然らば索を解ねて雜兵外道二が繩縛を

釋饒させて倶して高畷のほとりへ赴く程に外道二は幸ひに脚の矢傷は斜痍なれば。その矢を引裂て瘡を
つゝませ。杖に携らせて。その後信乃に從ひける。信乃は二十個の隊兵を倶して間路より悄々地に高畷に
赴く程に。樹蔭に潜伏て權且時分を窺ふ程に既にして定正は士卒二百餘名を將て走る鈴の
茂林のほとりへ赴きしとき。天分明ならずに戦ひ負も敗れけん。士卒忽地乱騒ぎて五十子のかたへ走るもの
多かる標幟鍬眉尖刀草鎧さへ棄たりけるを信乃は拾ひも見やりて是究竟と雜兵を巻して拾
合してその武具を着せ標幟を挿せなどして元来棄しける城兵の逃かへる似くに扮へ準備の火
丼を窃に持して然而外道二に恁々と計策を耳語示し一町許先に立て大家ひとしく五十子の
城を投て走りける。小程に外道二は信乃が籌策に從ひて五十子の城に走りかへる。是より先に定正に從ひ
たる士卒幾名歟逃走て皆かへり來て大山道節が勇戦の古叉の趣射方既に戦ひ肩て轂ゑめよしありし。
注進分明なりければ城内の士卒駭き謀て前後の城門を鎖固めて叨に人の出入を許さず加勢の軍兵を
せんとて議する程に外道二は忽地かへり來て城門を敲きて呼るやう。小可は是當城の雜兵外道二也。鈴の茂林の戰

八犬傳九輯巻二 〇文溪堂藏

に難義に及びて上下とも危うかれども武具を脱棄のひて葉武者に紛れ辛くして貝今ぞ帰城に及ぶ王
う。快々城門をうち開いて入れまゐらせよと叫ぶを正門を戍る頭人某甲より城櫓に登りて
たらくと看且ま城内の雑兵ども件の外道二と呼ぶ奴隷と認まるもありといへば現疑ふべかわら
ぬそぐ後に跟て近着まゐる士卒二十名許あり。標幟武具の色まちまち躬方に紛れまぎれかば。
原来館定正那内中に潜びて御座まるらんと。あるも猜して此も礙説せば遽しく走下りて。
却雑兵们に下知して。躯て門戸を開せけり。登時信乃ら二十個の隊兵を従へ先に立たく找
入りて。那頭人いまだ暁得らぬ雑兵を後方に退け。跪居て迎へ入れ。信乃刀を抜く
まもなく。只一撃に砍仆せば駭慌る雑兵を又西方名砍伏せて。名告知まる殻耳も失く。煉
馬の残黨大山道節忠與ら美義兄弟犬塚信乃成孝ら在り。我も亦大父匠作三成の
主君なりけり。故鎌倉の管領持氏朝臣の両公子。春王安王の奉為に吉凶を復さ
ぬ。命惜ら城兵们降参せよと罵懲して向ふ前竟大刀風に城の雑兵辟易して忽

地戍ぬと喪ひけり。然ば計畧その図に当て。犬塚の隊兵们。そも那這に火を放ちて当る
儘して殺伏々々。縦横亜礙に戰ふ程に。扇谷の君臣千百人の凶熟這日に丁度。西南の劾
風猛く起りて。その火城中に充満ければ城の士卒いとく慌て。殻ぶ馬ぶうち棄て走ぐるを
怒るもあり。弦を弓に当て合添て弓んとして呆るもあり。周章舉てゐべらぶそぐ中に偶
志氣ある老兵ども噪ぐ躬方を罵奬て。敵いまだ数人に過ぎざ。推捕稠て殻ぶまじと呼ぶ
鎗を引提て防戰んと欲まる城兵ども咸風下に在り。猛火も亦攻られて面を向ぶらの者
まぶ。男ある怯れるも共侶に身を焦き最期に臨れ夏虫の火虫にも似て思々ぶ。そぐ中に
辛く命を免れ皆後門より落去て。不覚の羞を。或は又逃後れ死後れ。せんまいに
俱に盛を脱ぎ鉾を倒して。敵の目前に平伏して命を乞ふもヨヌ。侍る刼火の中にして。鱟目前と
守如の。火も慌ぎ敵も怕れず。主従自殺の為体。且河鯉佐太郎孝嗣が城を退去の顛末。
前回に具に看官前後を照して。可べ。間話除敘。却説信乃は降参の城兵を数るに都て



文奚堂蔵

文奚堂蔵

五十餘名あり。即便その兵毎ふ吻咐て。水を汲せ火を滅さるゝふ素より案内るゝとて。立挿ふ
便利之又隊兵をも部して。前後の城門を戍らせ。火の鎮るを程ふ近邊の坊賈莊客
們。五十子の城と敵の為ふ攻落されを知るめる。失火ゆうんと思こゝ。大家ゆく棒と挾糊餅
柄長團扇を携て。那這より走聚ひ。かゝる。兵火のよゝを知て。且驚ひ且怕れて。逃去うんとまく
けると。信乃いそゆく。城兵を外ふ出て。喝禁めよと示し。招ひ入れて。城兵們を相次て。餘燼を鎮むべ。と
命せゝ。件の坊賈莊客們。戰栗庫を受て。幾千苞の戰栗を。煙と成さ滅留めけり。既ふて
那這の猛火ゆうゆう鎮りければ。信乃ハ。故老の莊客と。里正們を喚近着て。年来扇谷定正政事
好ヲと問ふ。大家実を吐ざるとゆるぞ。近属龍山縁連が出頭して。權柄を執りて。貢調を重
くして民の艱苦を憐まぞ。然りても年々の軍役ふ。畊作の時を失て。酷吏の惨ふ堪ざるゆゑ。
故ふ或ハ子を售り。妻を鬻ぶて。國主の欲ふ充るとゆけり。信乃ハこれをうち聞て。愀然として。嗟嘆ふ
堪ず。降参の城兵們を。ひとくとゆうて。若們も亦これを知るや。苛政ハ。虎より猛し。定正世の

名族として。國を治る所以を知らぞ。同宗顕定と確執して。且良臣持資を用ゐを克ぞ。家を賢
妻忠臣あれど。行路人の思ひを做て。佞人縁連の毎を重任して。民の塗炭を救ずて。これを聚
斂の臣ふ儘して。譴責を以忠とを。倩る故ふ。良茱ハ身を艱ふ效あれども。苦諫をのゝて。沼堂に諫
言ハ過を改る無あれども。違をあて。敢て聴ぞ。心を師とし。みづから賢として。貪れども。飽ざる故ふ。失ふ
所のゆゑ。ゆかる前ふ顕定を逐れて。鎌倉ふ雙立を。沼ぞ後ふ。景春ふ叛られて。毛越數个
城を奪れる。宜し大山忠與が。一將百卒の小敵ふ遇ふく。一笠前を射出さぞ。一人をも殺ず沼ぞ
まそ。二三百の士卒を亡ひ。今ハ我が三十個の隊兵ふ。當城を陷されて。士卒の死亡半ふ過ぞたり。定
正ふ敗績ハ自業自得とゆうゆう。百姓ふ何の罪あらん。我當城を沼されも。城ふ據り地を畧て。
武威を近國ふ張んと欲せば。今日當城を退くりの。若們四門をよく戍りて。
その主のかゝる來侵を折。ふの義を報て城を獻せよ。奴カ々怠るべゝぞと。嚴ふ告示し。又里正們ふ
うち對ひく。我若們ふ庫中ふ。金錢戰栗を取ぞ。速ふのゝ退ぞく。宜く配分致せかとゆう

まそ、欲ぶ衆人い迭ふ面を、注ゝ。速めい答難ゝ。信乃い毒もその意を猜ゝ。微ん失ゐ
ら諭ゝ。若们今愁ふ我賜を受るとふとも。舊の城主のかゝ変ゞ外ふ遇んとを怕れ〻。首
鼠両端の思ひを做ゝ。欲這米銭い若们ゞ妻と粥南ゞ子と売りて苛刻の重斂ふ調ゞふ
あゝ。我當城を攻陷ゝ。一霎時も當城ふ存ると。金銭米穀いゝ若们も亦我民
ゐ。我一日の父母とゝ。なでふ這民を憐ざゝんや。今我獲る東西をのゝ毫も犯ゝ所なく。
散ゝ民を賑ゝ。誰ゝ否ゝるのめゝん。且這庫中多米銭い兵火ふ焼るべゝと若们ゞ
聚来ゝ。消防勉ゝるをのゝ。遂ふ恙ゝ。その功も亦賞ゝべ。道理い徒地なゝ
ども。尚阽ゝ。せんもゞあゝ。ゝとひゐゝ。腰多墨斗を抜出ゝ。戰栗庫の白壁へ寫着
ふ數行の文を大家ひとく仰瞻るふ。

故鎌倉管領足利持氏朝臣両公子。春王安王小傅。大塚匠作
三戍之嫡子。犬塚番作一戍之獨男。犬塚信乃戍孝。以精兵才
二十名。来攻本城。須臾拔之。以與父祖雪先君舊怨者也。是併
同盟義士犬山道節。亦欲復君父之讐。是舉在資助其大義矣。
吾既已拔城毫無所犯。蓋以民者國基也。雖有金城石墉。然無
民其與誰共守焉。即開倉廩。而賑窮民。録數行以留姓名。一日
受于吾者。吾復來而屠城。勿悔。

文明十五年癸卯春正月二十日

諭示

とゝ寫さゝける。里正坊賈。荘客们さゝ其仁言を听這諭書を看て。孰ゝ雀躍せゞる。齊一
顙つゝ恩ゝと謝ゝそ。俱ふ戰栗庫とゝち開くふ一座十五間多ゝの五庫あゝ。各米粟三千苞
ありとゝふ。都てい一萬五千苞ゝ。又宝蔵ふ金銭ゝ。雑貨庫ふ酒ゝ。餅ゝ。乾魚ゝ。枚
舉ゝふ遑ゝ。當下信乃い又下知ゝ。酒い尊蓋を打除せ。餅い残燼ふ炙ゝ。衆人并ふ

その身の隊兵降参の城兵も酒まれ餅まれ好まふ儘に飲しも喰しもせその身八僅ふ纏腰戰飯を披紀て飢餓を繕ひけり。小程ふ衆人八部を走りかの近御隣村ふ告知して馬を牽せ車を推さ女ふ件の米錢を運ぶもあり。或八燬を免れる城の兼馬を借用ふ米を駝して牽出すもあり。然しも山做ふ米と錢を繞ふ半晌ばかりの程ふ送ふく運び盡しけり。登時信乃八里正と故老を誡めて約莫我賑給八這里ふ聚會ひ貧ふ總て這城ふ隷られる村落も莊園も坊賈と称く農戸とふく田圃戸口のヨヲ寡ふ合して漏さとふく配分せよ。若し倘一毫も私の私あらば異日我決して饒さじ。おのれ等ふ恣意の賜を誰ぞ私仕ん明日より君ぞ生祠を村毎ふ建戸々ふ祭りて御恩を子孫ふ傳へまらん。噫ふと嘻めでたしや身の暇をゆるべと別を告て皆共侶ふうち連立て退りけり。

第九十五回

頭鎧を梟く忠與凱旋も
敲盆の悼を定正過を知る

浩處ふ道節ふ莊介小文吾現八大角ふ共侶ふ隊兵六七十名を従へて五十子の城ふ來ふければ信乃八隨便隊兵ふ城門を開かし迎入れて却城攻の支の顛末計策その圖ふ當て一戰全勝を得るる。又倉廩を開て窮民ふ賑ふる支の趣并ふ降参の城兵を饒ふる次第ふ及べば。道節八莊介ふ四大士ふ向て各々も聞ひし欲約莫ふ售君の復讐ふ言ふ。酒家本人ふ向ふ。その軍功を論ずれば大塚ふ及ぶものなし。今より一級を降ら氏ふ上ふ向ふ。然ふ思ふ者やと口ふ曾ふ感激して已ざりければ莊介ふ四大士も且感ず且歎じて共ふ稱賛ふ堪ざりけり。且しく道節八又信乃ふ向ふ對ひて。定正敗北の為体及河鯉佐太郎孝嗣が忠孝解出目前ふ權佐守如が自殺の事。又毛野八河鯉守如が知己の義を思ふの故ふ辭して當城ふ來ぎりしを。他が遠慮の說論ふ及ばず箇樣々々と解示しく我定正を趕ひし折。才ふ盈て射落して裏缺ざりしふ遂恨ふ堪ども和殿ふ巣穴を攻破りて民の困苦を賑せ。ふ実ふ快ふ愉快の事ふ然ふ及ばずとも塀を毀ち塹を埋めて火を滅さざるその降卒ふ向を

戚りて武を赫しめざるを緩かりと怨むを信乃いまだ諫てふやう古昔の仁人志士は殘ふ
勝殺を祛けて化育を天地と等くせまくを然るとけの戰ひまよく人を殺せしは一個の仇城
を毀ん與のみ兵を宣ふ凶器なるを仇を毀る漏せしとて怒を移して城を毀ち降れる
兵を戚らざるは是暴を行ふのみその孝その義何処ふ勇と
ふべきに近世楠正行主は足利義詮卿を毀る走らしめ舊都ふ也ある折佐々木道誉
第を燔き唐山秦の蒙恬は趙の降卒四十萬を穴ひて竟ふ詭死の果あり當城千百の
士卒の如きは忠もあり勇もあり俱ふ命を惜むが與ふ命を喪ふのまよりそが中ふ鱗目
前あり又守如親子あり那主從の死を今初て悲むふ尾砾の中ふ碎ける玉とやらん悼む
べし惜れば那賢室と忠臣の與ふも屠を毀ち斬を埋め這降卒ふ戍ふて人の入るふ
儘しとて義ともいふ勇ともいはんと思ふは僻言なるべし欲とのひて傷をえんれば大角ふ官嘆
唱て大塚主の宏論ふ千金まそはれ昔保元の猛將為朝主は武勇強き儔稀なれ

ども只ふ當面の敵を射て相逆へざる敵を射ず常ふ神佛を尊信して皇威を惶るのみ世ふ
良將と稱らるふ烏朝倚ふ劣ひるふ一暴雄ふ過ざるのみ然ば世の常言ふ躬鳥懷ふ入ふ
とふは獵夫もこれを捉らんとふ何ぞ降參の城兵を誅ふ縱城を毀ち斬を埋るとも我ふ
這里を立去らば明日より又修復せれて管領必かつ住ん然らば勞して功なきとはいへ又莫ふ
小文吾現ふも道節と俱ふ諫めて大塚犬村両兄弟の既ふその理を盡されまして從ふと勿論な
るべし鄭ふ大阪ふ遠慮あり近ふ係の諸城より加勢あるべきよりとのられて凱陣を急しかるふ今ふ
速ふ退くと全勝とまべきのみ長詮說ふ要ふ似ふ快々凱陣まるべきと異口同音ふ寛釋
まらば道節ふ屈く思ひ返しとうち微笑て點頭て有理々々衆說ふ從へば鄭ふ仇を毀る漏
せしとて焦燥しふ心のるふ休らふを要るふ言と費しふ士ふ爭友あるとふはその身令名を失ふもとふ
聖教ふ今我らふ思へども亦ふるふ幸ふるふを辟言べ大阪毛野の如ふ未生の時より両個の冤家
あり并ふその面を認らざるれども單身をその仇を毀る果しふ又我仇ふ大諸侯を尤近つふ

易々ばかり。豆腐あり白井の郊外をそこを刺もとを辺りに仇をあらで贋物へ今は三四の義兄弟及落魄人々の幇助あり。且隊兵さへ多く辺りに寿策紛れ既に十二分の利運に至て逃る寃家を射られども口いその頭鎧を獲て首級と獲をも亦命拙大多かも。昨日大阪の我を相七意忡々風怒ありといへども謀計遂ずして遂るの如く敷る果さずしてその仇死なんとのいて真に鈔訣を成敗前より定るに似たり。昔唐山亜の隊讓へその仇趙無恤を辺敷る果さず才に仇の衣を刺す。竟に刃を伏られども隊讓の義士なるに害を我い隊讓に優べ仇を射てその盃を獲たり。則ち首級を代へ高曙の濱に鼻けて君父の神灵を慰へ今は天を怨んや。と嘶言がちくうち不娛て心も多く後方なる戰粟庫を焚そ剛才信乃が寫しる諭示の文を而三番讀復て信乃に對ひて和殿這城を拔て越に姓名を留めるそ意その文極めて勢を我その才に及ばども左力に筆を加へそ躰甲の合領より蠟墨を含ませ亦白壁に寫着るを大家俱に閲まるに。

復雠雪怨。非忠與孝耶。以寡克衆。非智耶。拔城不畧地。非禮耶。不誅降卒。而賑民。非仁耶。爲憐賢良自及。不毀郭。非義耶。進退以一日。非信耶。捐功不利已。非悌耶。吾有這八行兄弟。可以敵百萬騎也。誰茂如八行者。我君奪職兩管領。先世後嗣。其幸可知。

犬山忠與追書。とぞ寫さりける。大家これに真を辺て犬塚とのたまへ。

是風流の虚文にあらず。簡約にして言分明。勇士の本意に稱へるそ。俱に歎唱さりける。

幾十個の隊兵さへに教び勇をそ。焼刀の稜打拍と共侶に吐と發る勝鬨の一霎時に鳴もの。

已ばかり。既にして道に即ち隊兵を招て隊伍を敷引退とせ程に信乃は那外道に。

躬方の與に忠あれば。そを賞せんとそ尋るに他いる近に銭財を奪略んとも思ひけん。漫に深入

あるに。煙に包れて死にける。その亡骸を降卒ども。稍々出て恁々と報るを信乃もそうち

聞て。憶ずも嗟嘆に堪ず那外道に奴隷をそ忠誠義烈の徒なるねどいその命を惜むが

與ふ。忽地敵の間者と知りて城に陥せ冥罰覿面のまゝ賞禄を受けて身いまだ兵火に燔れゝよる難に臨て心術反覆敵の幇助ふるものゝ終に徒てをありけれそ。件の支の趣を道節們に解示せば。餘の四人も那応報の速るゝ嘆けり。徒而信乃道節。莊介小文吾現八大角ハ俱に數十個の隊兵を従へて高畷を投て退く程に五十子の城下より那濱邊迄至るまでその通路の坊賈莊客們ハ信乃が賑給の徳を稱へて俱に路傍に出迎へ各々簞食壺漿を薦めて歡びを演るのゝ。信乃いはゝ道節もそを慰めて東西に受き足より先に道節ハ五十子の城に來り折隊兵十名許を分付て躬方の戰死あるを弄ね及那谷山の頭に生拘措にる。仁田山晋五ハ又敵の首級を梟くゝ准備をせよとそ遣ければ。這時件の隊兵們ハ共に所役を做し果て高畷の濱に集て存り既にして道節們ハ件の濱邊に退に退にき。先晋五を誅せんとそ。面目則ち牽出さんとふ晋五ハ鄙に道節に射られまゝ虜に成にき。折谷山の麓なる樹幹に杙結着られて才に一個の雑兵にぞ守られて久しく存り。

方絶えの濱に牽寄せられ自分に下に位むとハ。矢傷の疼楚に勝ざる兄頭を低てのいなを登時道節ハ発見を放そ。仁田山晋五に立向ひ疾視て汝ハ鄙に戸田河原を丁田町進の加勢とそ。寇盜の罪人額藏們を追捕へとそ。折我晋第の舊僕なる。姥雪與四郎が両個の兒子。十條力二郎尺八が戰疲れを輟て捕へ來りしに素より其の身の職分を。主の與ふせ給ふれども。虎名を求め栄利を揣り力二尺八が首級を奪て。額藏信乃に。と偽唱へて梟首にして主に給へその勸賞に重用せられて。大石の家の家宰に做登りしに人の天を怕れ姦計を。罪と免る所あらんや。那額藏ハ我義兄弟に這る犬川莊介に。犬塚信乃ゆ在り。汝が緝捕その人を。紛ふ所曲られば這犬川に提殺るまで。遂に我箭に傷られしへ。則造化の配剤を。自業自得とのふ。先我る自頸殺る落て。十條力二尺八が與ふ怨を雪んを。觀念せよと責罵まば晋五ハ魂身に屑を連ふ戰慄を在下実に罪を知れり。命を饒させのひとかしとのせも果を道節が。拔刀を及の刃に殺られて滾

八犬伝九輯巻三
現八
信乃
大角
荘介
小文吾

八犬伝九輯巻三
十七
晋五を誅して
七犬士俱ふ
帰帆を
扇谷定正
道節
志ん五

に仁田山晋五が首は托地と共に落にけり。これを傍に看る信乃荘介小文吾も現八も六稔歴にける戸田河原の危窮をうち思ひ出て芒荒芽山邊の夢の迹揩平ずる音音が曳手単節の往方さへ心にかゝる潮曇り。濱邊に立る松に吹く風の便りも絶果て雲井に懐ひをいへばえに品踰き濤に友衛。當時に遇ぬ大角も。善悪応報怠ずそと人を思へば身も形ならぬく慰難て憖然たる。その中に道節は徐に刄を拭ひ斂めて。御京那隊兵が樹を伐りて造り立たる梟首臺に敵の大將扇谷定正の盔を第一番に梟させつ。次に仁田山晋五が首級并に數を捕たる仇の従類地上織平。末廣仁本太二階堂高四郎三浦三佐吉郎們は帯たる侍品の頭顱二十餘級定正を首として其姓名の知れたるは。牌に寫し推立て。征伐の事終りしかば即便這頭の浦人の長めきたるを両三名招よせて示すやう我は先亡煉馬殿の残黨なる犬山道節と喚做ものなり。復讐の戦ひ大利を得て。數を捕る首二十餘級方侵梟て這里に在り。只恨むらくは定正を斃し漏しつれども。射てその盔を獲たるにより權且首級に代るぞ若們浦人

迭代りにこゝを守りて。偸児にな奪れそ。明日夙めて人ありて來て這盔を贖ることあらば。よしそを告て遽しらせよかし。その折まで愼ろると叮嚀に分付れば浦人們は駭怕れて沙に額を穿埋めつ。異議なく言承ましかば。然しもあれ凱陣まうべけれとて澳のかたを看亘すに船は這頭にあらずして此柴浦の澳に見えけり。あれにより道節は餘の五犬士と共侶に隊兵們をいそがし立て浦曲縫ひに走ること七八町に及ぶ程に澳よりも亦くるそ。艀て船を漕寄せけり。登時陸なる隊兵們は始めぞて相別れて二三艘の船みうち乗り。道節并に餘の五犬士は毛野有種們と同船して。迭の歡びをのべくもあらず道節は先有種に躬方の戦歿金瘡兒の多寡を誰何と尋問ふに有種答て然ン候。御高命せられる雜兵們が索ねて浦邊に扛もて來ぬる躬方の金瘡兒は八名。深痍なれども窮所にあらず戦殁は一人もなし。隨便金瘡兒們に准備の薬を飲せ。瘡を裹こと勸りて。昨宵在下がうち乗来ぬ。快船に扶乗せ看病奴一名を傳て穂北へ還しつ。と報るに道節點頭くそがよく計ひつ。さばれあの船は高畷の浦にと約束をしつるに那里にはあらで這里へ寄せしは甚

麽ぞや。と問へば有種然ばそを亦以ある事なれど。間ふ船い皆洋中ふ漕浮めゝふ北へ走るぞ。假名川のゝ。と投て急せゝと。道節いふく。訝りそ。又その故を詰り問ふ程ふ毛野い有種の答を。道節ふ對ひく。大山主這船と。約束の地方ふ歌げぎ。故意柴浦ゑ。漕るも。今又北へ返さでるも。皆是洒家ゲ指揮ふとそふふ道節眉を顰めその故什麽ぞ。と急迫く問へば。合戦天てのまぎ思ひのぶぎ。洒家いゆゝ和殿も亦既ふ大敵と戦ふこれども。仇の種類の竭たるふあゝば。倘我徒方と知るのありて。扇谷家へ告訴せば。大軍重里て推寄せぎべ。その折敵防戦ふ一城壕のあるあゝば。二百ばかりの小勢とそ。只是穂北の莊院ふ。有竜るもいゝ七半日ゆゝも拄ゆん。縦戦殺と。ゆゝも。我们い覚期のうえ。悔ふ足らぬ。氷垣の老翁落魄夫婦と共ふ狩場の雑子と做さ。面正くも。所行ぞ。まの故ふ我出没を後々まで人ふ知せじと思ふそ。船と約束の濱邊ふ。數ふ。苦と深く。昔樹て遠く柴浦の澳まゝ。然ば又羽田の澳ふ漕登さて。那里ゆそ日と銷し。夜深て穂北へ還らば人ふ知れぬ後安ちい。

あの説ふ儘し。ゆとその遠謀を解示せば。道節并ふ餘の五大士们も毛野が遠慮と感嘆と。ぶと。古て盃の緒と縮るとの。世の常言ゆも稱いち。然まで。我们が心屬ぞ所へ心術智玉と。虚しく。誠ふ感心々々と。齊一稱賛ぞ。信乃毛野の二大士ハ。迭ふ初面會の口誼と舒る。ふ是宿因の致ぞ所。心同く。意相愜ハ一面ふ。故旊の野ふ對ひて。恁々と。信乃ゲ五十子の城と火攻して。此も躬方を損ぞ。瞬息間ふ城を拔て。降卒と誅ぞ。且倉廩どうち開ぞ。貯ふ民を賑して。仁ある義ある支の趣。及戰粟庫の白壁ふ。姓名と留める。論示の文の愉快る。並ふ道節ゲ追書ぎ。或い誦し。或い談して。迭代ふ解知ぞ。毛野ハ只管感激して。約莫我兄弟ハ自然ふ亨ぞ。玉と俱ふ。その性小く異なれども。孰ゝ疎闊るべくもあらぞ。就中大塚主ハ金中の紫磨玉裡の夜光と。ふとも過論るべくば。洒家い決して及びて。と誉ると信乃ハ推禁めて。いふて。然るとあ

らんや。大阪主は文あり武あり。その學術の廣博なる。陰陽卜筮說相まで。よくせざるとなく。真實ふ軍師の才。則是禽中の亦鳥鳳。毛裡の麒驥といまくのみ。且犬山の剛毅ふして。決斷ふ速なる。犬川の行婦塚犬飼の芳流閣その才その武ヨヽく沼くて。又犬田は能を顯はさぎ。已ことを沼ぎして。做きとは。必是紗處あり。約德の角觝石濱の窮阨是。又犬村は謹慎老実言寡くして。約ふは旦取篤から。實ふ是君子の人なり。人心同じからぬこと。猶人面のごとしといへども。眼横ゐ鼻の直は。孰か亦異ならべ。されを統るふ八約の德各々一個を沼るふ。庶は我義兄弟ふ在りといへ。然れども今は。孰を長とし。孰を短とせば。倭論まれば。釋迦ふ說經孔子ふ語道ふ似れども。あまねふ太く譽らるゝ。苦しは隨ふいへとも大家感服。その義寔ふ私論ふあらぎ。這両才子微りせば。紗批紗評。听易くぶ。身の程々の玉ふ恥ざる。約狀ふ相慎ふ優きとあらんと。笑與して亦復餘談ふ及びけり。姑くまで莊介は道節ふ悄語くゆる。大阪主の遠慮ふ就て。胸安くぬるとそは。落魄生が陸ふ登りて。品草ふて敵を數き。折名告棋て戰ひたるに。那人は是郷士の女壻。我們と同ぶ。莊園居宅を敵方ふ知らるゝ。あるとまでぶ。思ふ懲ふ後の禍を。遠ま似ふ。その義を尋ねるぶ。やとふ道節眉を顰めて。心つぶは。快よの者。与えしと喚ぶけれと。答て後方とぶ。毛野は聽くも側聞ふて。道節を推禁め。犬山主ふの。なる者ぶ。落魄生ふ問ふも及ぶ。その義も酒家ふて。那人は尋ねふ敵ふ向ひて。名告りまでぶ。只旧君豊嶋殿の與ふ怨を雪るとふ。吸くるのみとふ。必よ心安ふ。と報ふ莊介道節は。共侶ふ。笑て。何まれ脫落ふ。機轉ふて。感ふる。折ふ落魄有種は。別船を炊くふ。戰飯と酒餚を。処陜まで安排べて。七犬士ふ薦れば。別船ふ隊兵們も。漏るゝ。飲食まで。迭ふけの勝軍の祝壽と。做を程ふ。船は羽田の澳ふ來るけの。是ふ。ふまで。七犬士は有種とも。固坐ふ如く。言は漏くるゝ。毛野のみ。ふまで。知らぎけり。大法師の甲斐を去りて。結城ふ赴くと。ふまで。緣由又蛮崎十一郎。照文が。安房へ還りしふまで。解ふ。中は小文吾と共は。那石亀屋次郎太ふ及。卿三が。ふまふ云云とふ。出て。犬阪主の妙方便

也。次園太が冤枉の縲絏を釋れんとぞ思ふ。鰥目前も河鯉生も世ふなき人と
なり。然るに那支成就せざるべし。是のみ遺憾かな。とうもも不娯々相譚ふに毛野の側ふち
に。大田主大川主の義も心安ふ成べし。昨日湯嶋の社頭より越後へ使ふ立られる妻有復六
とぞ。侍士八鄭二と相俱にて只管路を急ぐべし。然るに鰥目前の逝去のよしを片貝
殿。簸大刀自へ告らるとも其ゝ前ふ那使者へ越後へ到着せざれば次園太八赦ふ遇ひて又那妻
有復六ゝ我実の姓名を。少知らるゝのみあらば。這方のものゝ者とも決して障るあるべきぞ。非
除鰥目前の逝去のものゝ。奉ずるとも。簸刀自も亦女儀。那生前の願ひ。
次園太の命とぞ。倒泉憐の心起りて。速ゝ赦と行られん。孰の方も支
成るべし。然るに疑ふとぞ。慰められて。小文吾荘介寔ふ理あり。と応ず。共ふ憾く思ひけり。
是なるを言の始めを各々會話の限りもあらば。春の日の長きも。暮果て。折よく田夜間
ゐるければ。かへさも便りなくぞ。大家卒や退らんを。潮候近く順風ふ延帆揚ぬ三隻船

揖ふ儘に共伯ふ北を投てぞ。まらせける。話分両頭。小程ふ。扇谷定正い高畷の東盡処
に。犬飼現八犬村大角ら。一隊の精兵ふ趕逼られて。ゆく危窮ふ及び。折料ぞも河鯉守如
親子の為ふ極れて。辛く虎口を免れしゝ。その隊の士卒。十五六名ふ守護せられて。忍岡を投く
走りつ。才ふ一時許の程ふ那里の城ふ入りぬ。後安しと思ふめるゝ。鄙ふ大山道。即ち射られ折着
なる盛を。そを失ひ。それ辛ひふて裏を缺ぎ。と思ひい虚憑を。笛前嗚の砦ふ。故を。その処大
く瞳られ。猛可ふ痛楚ふ堪ずして。そぞ伏書院ふ倒臥て。めぐりもあらぬ。當城の諸士
驚騒ぐ。殿酉師を聚合療疵ふ術を盡さるを。更ふ軍馬を調出して。攻陷されぬ。五十子の
城とり復さんと。議ぞめるあらば。亦只這里ぞも。勁敵ふ責られ。もあらん。秋とく四門を鎖して。銃
窓を配りて。小心の外ぎりけり。然ば又河鯉佐太郎孝嗣い高畷の板橋を。敵ぞも情ある。毛野
道節が至極の意見を。聞くとぞ。立別れて。主君の迹を慕ふ。父の亡骸を扛舁せる。轎すと
先ふ立て。馬の足極を早めて。忍岡ふ来ふければ。權且路傍ふ道場へ。父の亡骸を扛入さて。

寺僧に告て預け措て又隊兵を従へて忍岡の城に入りて王君の安否を伺ふ館に剛才老もうく。
當城に入せぬひに猛可に矢傷のあ悩をうち臥て在もとゆえ速に見参もべくもあらぬ。
遠侍は伺候して起出めくを待つめうく當城より軍馬を出し遣て五十子を冠を征せと欲
る准備もえぞれいと浅ましと思ふのを身に尚弱冠也且遊倖なるもそのを非とうしよりも
ゆくこの日を消し夜を暁を程に稿まおりくよりもあれば次の日の暁天に獨退にて馬にうち跨り其
身の伴當のをとれて五十子を投てのそびけり既にして孝嗣は柴浦まで来る折先高畷に赴
いて濱邊のうを看耳甘べ果しと敵に梟られる。彼方の首級ヨヌくあり。然べそとそ遽く
馬を找てよくてるに主君定正の盛を首として。仁田山晋五地上織平なんどの首二十餘級あり
けるぞ中に何人かうけん定正の盛の邊に一箇の牌を建添て。
昔蒲菖宿るうなくに
退軒だ
盛首の此場にかけて敵にいけりとあるけるを孝嗣はうもるを連に嘆息せ程に那浦人ども
出て来て昨日道節に吩咐られる支の趣箇様なりと告るを聴くも不娛しに多く盛を御ま

ちそ。袱に裹を伴當に駄せて。件の牌を摧毒葉と貯て五十子に赴て城内に入そ大に昨日敵に
降参をそ恙ぬとを泣る。士卒们はうく落亡る兵毎も敵の退にるを少知て大家かう
来ぬけれいの時城内に聚合るの這那二三百名あり。孝嗣はそ中に老兵们を招にて敵の
動静を尋問に逃るも降参せも口を合。左非を飾て然いに小可们はの敵の火攻に不意を
毀れ烟に巻れて力及ぬ一旦に退ていひに敵に幾程く起去く重て寄せる冠もみれば入替り
火をうち滅て四門を成りひとりを孝嗣に疑ひ焼亡れる処々と那這と撿に戰栗庫と宝
藏の金銭米穀に一箇もあるぞそれに庫の白壁に寫しる信乃道節に諭示の文あり。越に初て
賑給の支情の知れ孝嗣憶ぬを感嘆して冠るも那毎に世に稀に英雄にと思
心を言あ出さぬ馬ようち跨て馳く刃心岡の城に還りて同に館に髪中の疵痛聊癒
ぬとて起出のひと伺えば即便近習们は就て孝嗣一大事を稟上と欲もいくに見参を許を玉
ひと請まうもうに定正にをうちゆてあるぞもがと思へども昨日高畷の窮阨を他们親子に極れ

なるふ一大事とあれども置れぎ躾て左右を遠さけてみづから對面せられけり。登時孝嗣をかそるく膝を找めそ。撲傷の平愈を賀し。凛し。却蟹目録の事。竝ふ父守如が自殺の折ふを送しる。支の趣いかゝ。那縁連們が囮を賣て竊ふ北條氏(佞媚しる)伎倆の顛末を咎えあげ。上樣即前を問ふ。始よりその美を猜しぬ。縁連們を除んとそ。豫て竊ふ守如ふ仰合されとるふ。爲日湯嶋へ御社參の折。坐數る師物四郎とゝのゝ。他ハ石濱る。千葉家の忠臣と咎えさ。栗飯原首が送腹の子そ。姓名実ハ大阪毛野亂智と喚做もの。然ば又縁連(毛野)父の仇ふれば年来在処を索ゝ。守如不思議ふ守知そ。上樣の御意を伺ひ件の毛野を相譚て縁連を數るせしふ。その密談を煉馬の殘黨犬山道節が偷聞そ。猛可は舊好の精兵を招ひ鳩め。昨日縁連が數るれし折。支の紛れふ五十子の城を龍袞と謀しふ君ハ守如が諫言を聽召れぎみ〳〵毛野を追捕へんそ漫ふ御出馬ませ。道節ふく便宜とゝそ同盟の勇士と共ふ君を挾く攻ます。又道節と一味の勇士犬塚信乃戌孝と喚做もの。隊兵才ふ二十名を引て詭の

這段已ふ看官の知る所。上重復ふ仮されども本ハ巻末に説ぎ繁き論べくもぞ

計を行ひ忽地五十子の城ふ入るとゝ沿て。火を放く攻くうければ城内の士卒狽ふ噎びく防戰の術を亡ひ戰殺せしも尠くもぞ。その餘ハ大家ふ落亡く。敵ふ大城を畧られとり是より先ふ件の毛野ハ道節と一味のれもそ。昨日守如と密談の趣を内通せしふ。這驚きありとゝ風聲そ。穿えくふ。上樣驚ふ悔さきめて。怒ふ君の側る。奸佞人們を誅せんとて出処不定の坐數る師ふ支を求れくり。上樣も仇ふ報られん竟ふ館のゐ大事ふ。あるを作麼いかゞハせん。切て館ふ先たちそ刃ふ伏ゝ。君ふれと思ハぬける赤心と後ふぞ知せまつゝんとそ。非命ふ終りのひふ終ふ入守如ハ御出馬の折。御意ふ違ひて。九鐘を中さそのひ。撲傷そ。その朝より臥て在り。那衍岑を悔ひ。毛野を恨そ。送言右ふ禀せ。如く腹搔斬く死せる折汝ハ當城を快立退て館の尼宮を救ひまつれ。倘その期ふ遭ふ。敵ふ向て戰歿せよとのれ。ゝ理ふ。れば。躰て上樣のゐ亡骸と轎の子ふ乘せまつる。恋ふ士卒とて。御菩提所へ送りまつる。小後父の亡骸とも。亦轎子ふ扛乘せて同士の每二十許名と。猛火を犯て後門より走出ゝ我君の御先途ふ遇ひなり。親共侶ふ

御馬前を横ぎり屍を蹂さんと思ひしうの空を危窮と極ひまろーべ追蒐る敵を拄へ
與ふ高畷の東畫処る細小川を前ゐて止まる士卒十餘名と倶ゐ必死を極めーゐ敵の左右
る敲るも蒐らを相睨て存る程ゐ敵の士卒ハヨヌ勢ゐるそ道節并ま毛野小文吾荘介と
俄ーンも聚合ひまろゐ毛野ハ道節を君と狙敲るの計較と知を迭ゐその名と問て彦の
あの折初て對面の口誼具ま問えらゐ徳れば那風聞へ実事よあるを昨日湯嶋の密談と道節
ゲ倫聞を君と犯ーまろーる同むを分明るそと思ひ縁連を詠せ毛野戎討
て ゐゐるれーゐ上様のあ衍るらゐ只計策密るで仇ま倫聞せられる守如ゲ疎忽の罪のを稟
去解べるうのるけれ臣も只戰殺の覚期の外いるーゐ毛野と同志の勇士們と惰る道節を
共み諫めく守如ゲ忠誠と相憐むを天くるゲ道節も亦思ひかへけ川を隔て對陣まろ
登時臣恢え難屋敵と喚ひけて戰ひを討めーゐ他们ハ鉾を交えと欲せを只問答ゐ及び
のを毛且道節ゲ仁田山晋五と虜ゐせー折ゐ獲らとろ馬と放ちて還ーゐ勢ひかの如く

これば是非ゐ及ばを立別れて件の馬よりち跨ゐ君の乞後を慕ひまろそ當城へ来ろ折則
親の亡骸を路の傍ゐ道場ゐ預置て御安否を伺ひまろーゐ御病臥のよりゆえーるを御産
可をまちまろーえ與ゐ遠侍ゐ候ひて昨宵を暁ーゐひーゲ敵の進退心ゐ懸れば未明ゐ馬ゐうち跨て
五十子へ赴く程ゐ先高畷へ馬を找めそ濱邊を看耳ーゐひーゐ斬梟られる躬方の首二十餘
級ゐりそ中ゐ我君の乞盛もええれば最惶ゆよ食卸てそを携て五十子の城の光景を
あれてえくるゐ敵の頭人犬塚信乃ハ一日も在城せを金原どち開えて飽まを民ゐ施ーその
義を白壁ゐ寫者て姓名を留めくるゐ次ゐ道節ゲ追書もありそのの文ハ箇様ゐゐ恁ゐ
ゆひえくーゐ一字も忘れを誦るを一遍誦果て又稟まろ。任れば既ゐ五十子の大城ゆり
敵一人もあらを離散せー躬方の士卒のかの来るゆ二三百名四門を成てゐえをゐ加勢れて
士卒と遣されて後の非常と敬言めーゐ。ゐくを異まゆん臣然ーも命と惜ゐを當城ゐ免れまろゐ
あーゐ上様刃ゐ伏ゆひーゐ犬阪毛野も道節の支黨ゐんと思召ーを口ハ一筋の赤心ゐれども

毛野と道犬郎が做を処。その志異なれば上様に一毫もあん衍いひ難。その義を守るあげもあらば賢夫人の御貞実を悟らせ給ふもまた義烈反て狂乱の類に似るもあん疑ひのあらば。

と思ひまうして。存命する甲斐あれば今日見参に入るのこそ。薄情や敵に捕られる。あん盃さへ含まも隠して返しなるとて泣れ。非除父が疎忽の罪也。その身を刑戮まぬとも。そい免る処る一只上様の御婦徳を思い当らせ給ひ父が自投も臣る道に聊稱ふよりもあんなの義を願ひまうるのこと演る言葉の本の露末の霜も委しく落る涙の河鯉も清い流に音ちる二代男の忠孝義信。おろ紅色に顕れて後方に置たる祇包を解ぬ。茶一盃を盛を定正に傍に措せ。赧然と且差てよくも老又孝嗣にうち對ひて這盃を當家の祖先国清寺住山道昌老侯（上杉安房守憲顕の法号）の寺持院殿（滝氏の院号）より賜りて。希代の名器なり。けれ。命けて益前返と喚れる。然ば昨日の戰ひに我身に冠に射られ折盃に聊破れども。裏缺ざるに以あるる只面ぶれに家伝の盃を冠に含まれて剰濱邊に捕れて隠せ。

せ。佐太郎公の及ぶ忠義の挙に感ぜるに餘りあり。又縁連が奸悪に這城内の甲乙もあり死を守る。ものあり。北條氏と和睦の一説に我伝を初て知れる。必ず向ふ処を更て今ある必杜絶せん然る也。そも鮮豆前に我伝を諫難。人を借て縁連を誅せんと謀る。我妻ぶ。才あり智あり。我及ぶる処ぶ。那伯闇の錯誤より。忽地刃に伏ぶ。他が薄命のこそ。亦我一大不幸況守如が精忠苦郎その死に臨む子に誨て我が貞泥を拯ひる。その功も亦鮮小ぶ。又那毛野と密談。道犬郎よ。ぶ。必疎忽とのべ。我自生運の悪敵也。賢妻と忠臣の一時に命を殞せ狐鬼の出ぶんかと。今ぶ悔るとも。往る事に追べ。只哀しくも欽し。孝嗣汝が忠孝之異日必勧賞あん。退て疲労と頭に。姑且暇を取せ給ふ。孝嗣に感涙を禁難々言葉に。遠侍退り。介程に定正に這忍岡の城を守らせ。一個の老黨根角谷中二麗蕭と喚做。有司の毎数名猛可に送ぶ。召集せ。河鯉佐太郎孝嗣が忠告の趣を固様々と言示。佐れば今五十子の城内に留る敵に。只貞方の残兵に門を

成るとうけれども。加勢の軍兵を遣して後あ非常に備ふべし。且焼亡れる処々を速ふ修復の事
三十日ふ限るべし。我快那里帰城せば西を防ぐ力足らで隣国の敵ふ侮られん土木の工ふ怠
慢あるべ。伝と若们を罪せんとその才ふ堪さるのを擇て工匠の司を課せよ又鮮目前の古殿ハ
留めて香華院ふ在りと雖も宜棺槨を造り大衆を聚合て葬式を執行べし。又河鯉守如
忠死ふ赤憐むべし。且その子孝嗣ハ我を水火の中ふ極りその功只是一人ハ親の本領を賜ふ
べ。
その上ふ守如の葬式料青蚨五十貫文を取らせよ。鮮目前の廟墓の頭ふ守如ども葬らく
者らぐけんせつせのちよりよれつ。
主従賢良精忠の餘烈を後ふ貽さんと欲せの。餘の古文ハ左ゆる右ゆる若们冥く商量て職
ど
支を分ち祈りそとくせと命せる。大家これを義りて。一議ふ及ばず退歩々先五十子の城へ遣し加
勢の士卒を猛可ふ汰へて根角谷中二頭人ろその餘城内修造の有司们十餘名雑兵五百
餘名を従へて谷を馬をよそ。五十子と投て来ふければ。城内ふ拭入て残留り士卒们ふ
敵の退口を問りべ。初て高曙の濱面ふ躬方の首級を斬梟られてまくあるとり知らん。

人を遣して令を隠さんと欲されども既ふ二日ふ及びを如右せば世の人ふ笑れん然ばとそ葉措ハ
ていらく館の恥辱ふ。
駿蘭二と喚做せの賢ばそて情語くやうそ究竟のあてそひへきのハの朝未明ふ柴浦ゆ里
正们ば訴訟せ奇譚あるその義を什麼と鞫れ。ふ媼内舩中と狡喚做ゆ強盗夫婦ば那
首の閻魔王の冥司訓ふあり。俱ふ牛ふ突殺される屍骸ふその做ゆ悪事ふ寫着てあ
アとのとおんちゆ。
藉のタ方そ。館の出馬せ。城さへ敵ふ火攻せられて。侍る光景ふ。
知るとりも。今ふ及ばずとそて。討るふ柴浦へ展検使を遣して。支ハ虚ふ。
婦の首を斬らて今宵情ふ躬方の首級と梟答ふ看るの必疑惑ふ。
灵験。
即便宛栗専作と喚做る。訟獄隷の卑職役ふ。

船虫が枉死の虚実を糾せーふその支都て奇異ふして。閻魔の王験灼然るけん疑べ
くもやられば。専作只顧駭嘆ど。隨便媼内と船虫が。枯首と斬せる。その時既ふ日の暮け
まべ。専作们へ件の首級を。高畷の濱邊へ。そなへて。然而斬梟られる躬方は首級と。咸令卸
まそ。その頭髪毎ふ一隻の小石と結着て。悄々地ふ海へ投沈め。更ふ又媼内と。船虫の両箇の首
級を。梟首堂ふ雙梟け。他们が背ふ記される。罪悪の趣を。牌ふ寫着け建置て。大家五十
子の城へ還るけり。次の朝より是をとりすめ。或へ詛ら。或へ冷笑て。悪評らゝ。賞品々ら。何人ゝ又
ゝ建くる牌ふ一枚の短冊を糊添て。又落頭を寫ーくら。其詞ふ。　生活日ふ方の術
あーべ醜。即も美男ふゆーん首の入れ替とあるけり。例の人は癖るべー。支へ扇谷の墨吏们が。児
戯の拙策ふ成るとへども。佞る折ふ媼内船虫が。罪悪の世ふ顕れ。亦是造化の默契歟畢竟
二兇梟首せーれて。後の話説其麼ぞゝ。次の巻ふ解分るを聴給かー。

南總里見八犬傳第九輯巻之二終